

# 地元に戻ろう～月影を探して～

《タイトル》

《01 都会の夜空に満月》

「日本では、見えないね。ツキカゲ」

「ツキカゲ？ツキカゲってなに？」

「月の光のできる影のこと、日本語だよ」

「え？ああ、ムーンライトシャドウ？」

「イエス。そうだよ。今日は満月だけど、街の明かりが強すぎて、自分の月影がどこに出てるかわからない。」

「そういえばそうだね。うちの田舎じゃ、当たり前だけど。」

「ショウマ、君の田舎はどこ？」

「山陰。鳥取県だよ。」

「ワンダフル！ショウマ、君の故郷、どんなところか知りたい。」

「な～んにもないところだよ。」

「日本を離れる前に、行ってみたい。よし、今度の休みに連れて行って！」

「急だなあ、だめだよ月末でお金がないもん。」

「ノープロブレム。チケット代は僕が出す。大丈夫、大丈夫！よし決まり。」

「ええ？」

《02 ダンディンの豪邸→アパート》

ダンディンはアフリカからやってきた大金持ちの御曹司。本国に戻ると日本では想像できないような豪邸にいらしています。庭には二つも三つもプールがあり、車庫には十数台の高級車が並んでいる。たくさんの使用人がいて、生まれた時から贅沢三昧の暮らしをしてきた。ところが、ダンディンが日本留学の間、選んだのは日本の大学生が借りるようなごくフツウの学生用アパート。それなのに「日本サイコ～、ずっとここで暮らしたい、本国に帰りたくない！」いつも口癖のように言うのでした。

《03 飛行機の中のふたり》

「ねえ、ダンディンはなんで、もっと広いマンションで暮らさなかったの？」

「部屋の中が狭いと感じた時は、外に出ればいい。日本は建物の中だけじゃなく、どこまでも、まるで自分の部屋と同じようにリラックスできるね。24時間店が開いていて、夜だろうが、安全に歩き回れる。」

《04 豪邸のまわりは荒れ地》

「僕の家は、塀の内側は快適だけれど、家の外に出ると貧困と暴力があふれていて、とて

も危険、ガードマンなしでは外出もできない。とても不自由だ。その点、日本は一人でどこにだって行ける。町は安心安全で、すごく自由。こんないい国他にない。ずっといたい  
に決まってるだろ！」

「そうか、日本で暮らしていると安心安全は当たり前だと思ってたけど・・・」

「トットリやサンインは違うのか？」

「まさか！同じ同じ。ていうか、むしろもっとそうなんじゃないかな。だって、あんまり人がいないから（笑）」

#### 《05 飛行機の中》

「人が少ないのは悪いことじゃない。むしろ利点じゃないか。小回りがきくし、物事がスピーディーに進む。それに、なにしろリラックスできる。都会は人が多すぎて、どこに行っても混雑、行列、順番待ちだ。このストレスは問題だね。欧米人にとっては都会で暮らすのは修行と同じ。早く息苦しい都会から脱出して、地方でのんびり過ごすのが理想だ。」

「みんな週末やバカンスになると、さっさと都会を離れて自然豊かな土地に向かう。ショウマも卒業したら、地元に戻るんだろう？」

「いや、まだ決めてないんだ。地元には企業の数も少ないし。給料も安いしさ。」

「ショウマ、都会に残っていると、時代遅れになるかもしれないよ。」

「え？なんで？」

#### 《06 水素社会》

「これから、AI（人工知能）や車の自動運転が社会を劇的に変化させる。動きは地方のほうが早いかもしれない。エネルギーもそうだ。水素社会の実証実験をたしか、鳥取県でやってるらしいぞ。」

「へえ、知らなかった。なんでそんなこと・・・」

「ちょっと勉強したんだ。サンインとトットリについて。スゴイところじゃないか！ほら、あれ、あれはもしかして！」

#### 《07 飛行機と弓ヶ浜》

「弓ヶ浜半島のこと？」

「Oh! 弓ヶ浜！アメージング！」

「え、え、そう？」

「ショウマは知らないのか？むかし、日本中の鉄の8割をサンインで生産していたんだろ。証拠がああ弓ヶ浜の地形だ！そして鉄の芸術、日本刀もトットリで生まれた！」

#### 《08 安綱》

「え～？そうなの？」

「昔は、鉄を砂鉄を溶かして作った。」

「ああ、たたら製鉄だね。」

#### 《09 たたら製鉄》

「サンインの山でとれる砂鉄は良質で、その砂鉄を採るために、いっぱい山を崩したんだ。その土砂が大量に海に流れこんで堆積して出来たのが弓ヶ浜だといわれている。」

「えっ、そうなの？」

#### 《10 弓ヶ浜と日野川》

「海に砂浜が伸びる、砂洲という特殊な地形だ。砂が堆積して出来た砂洲として世界で有名なのは、フランスの世界遺産・モンサンミッシェルだけれど、弓ヶ浜は比べ物にならないくらい巨大な砂洲だ。機械のない時代に、人の力で地形を変えてしまった。すごいよ！」

「いやいや、あんまり巨大すぎて、地元の人自身が砂洲の上で暮らしてるなんて、だれも思っていないよ。だけど、それってある意味、環境破壊だよ。」

#### 《11 砂漠の古代文明》

「そうだ。実は、世界の古代文明はそれで砂漠化することが多かった。鉄を溶かす燃料に木を燃やした。都市の周りから森がなくなり、土地は保水力を失い、雨が降れば洪水がおこるようになった。大量に土砂が海に流れ込み、今度は砂が打ち寄せ、陸に戻ってくる。風を妨ぐ森がないので、海からの風が砂を舞い上げ内陸まで運ぶ。砂はどんどん広がる。ますます緑が失われ、乾燥が進んで砂漠化していく。」

「そうか、古代文明は最初から砂漠にできたわけじゃなくて、もともとは緑が豊かなところだったんだ。うーん。何千年も昔から環境破壊問題があったわけか。」

「ところが、日本だけが違う。日本だけが砂漠化しなかった。なぜだ？」

「植林をしたから？」

#### 《12 緑豊かな棚田》

「その通りだ。植林をして、森を育てながら、ローテーションで伐採するシステムだ。それだけでなく、伐採した土地を水田に利用もした。それで保水力が維持されたのも大きいと思う。日本人は緑を大切に守ってきた。それで砂漠化をふせいだのだ。サンインはその偉業をなしとげた、人類史的に重要な土地だと僕は思う。」

「へええ、いままでそんな風に考えたことなかったよ。」

#### 《13 中海と大山》

「中海もスゴく価値がある。高度経済成長期に汚染された湖が、人々の努力によって、数十年かけ、本来の美しさを取り戻した。いま世界中で公害や環境問題がすごいから、環境

改善の先進事例として、中海はこれから世界的に有名になるだろう。」

#### 《14 牛骨ラーメン》

「なんて美味しい水だ！日本のレストランはどこでも氷の浮いた水をフリーで出してくれるので驚きだが、これは特に美味しい！奥大山のミネラルウォーターは日本全国で販売されているな。これもそうかい？」

「いや、たぶん水道水だと思うよ」

「なんだって?!これが水道水？」

「米子市の水道水は、大山の伏流水をくみあげて、申し訳程度にしか塩素をいれない、全国で指折りの美味しい水だって聞いたことある」

「水道水？ということは、このミネラルウォーターを洗濯やお風呂にも使う？」

「まあ、そうだよな」

「アンビリバーボー！」

#### 《15 大山》

「世界からみたら、日本は嘘みたいに自然が豊かだ。その中でも特にサンインはなんでもそろっている。海と山が近くて、湖に川、砂漠のような地形まである。日本でも指折りのくっきりした四季、季節ごとに美しい風景。海の幸、山の幸、何を食べても美味しい。人々はみな優しく、町は安心安全、心からリラックスできる。地球上でこれ以上幸せな土地を探すのは困難だと思う。なぜ、ショウマはここに帰ってこようと思わない？地元でくらしをせない、特別な理由があるのか？なにか悪いことをして逃げているのか？ショウマは犯罪者なのか？」

「なんでそうなるんだよ！」

#### 《16 ふたりのアップ》

「…だって、田舎より都会は刺激的だし、いろんな人が集まって情報が多いじゃないか。」

「情報なんて、ネット環境があればどこだって同じだろう？それより、ショウマは将来結婚して、家族を持つことを考えないのか？ショウマの家族も都会に住みたいのか？」

「う〜ん。考えないことはないけど…。将来かあ…」

「ショウマはいったい何のために都会で暮らそうと思う？」

「何のため…？そう言われると…。実は最近、悩んでいたんだ」

#### 《17 都会の雑踏》

「満員電車だったり、町の雑踏の中にいると、自分がものすごくちっぽけに思えて、たまらなく不安になる。ダンディンはそんなこと感じたことない？」

「自分がちっぽけ？不安？」

「そう。自分がいなくても、社会は全然変わらないんだろうなあ、僕がいなくても、社会はちっとも困らないし、自分の代わりなんていくらでもいるんだって。自分の存在なんて、まるで意味がないように思えて……すごく孤独を感じるんだ。ダンディンはそんなことはない？ ある意味、僕なんかより、ずっと……。知らない国へやってきて、孤独や不安がないとしたら、それはなぜ？」

#### 《18 米子城天守台から見える夜景をバックにふたり》

「僕には目的がある。日本を学んで、良いところをマイカントリーに持って帰るね。国をよくするのに、きっと役に立つ。そして、いつかマイカントリーと日本の交流、架け橋になりたい。」

「そうかあ、えらいなあダンディンは。国を背負って来てるんだ。孤独や不安を感じてる場合じゃないってか。」

「僕だって、寂しくなる時あるよ。でも、家族や友達の顔を思い出すようにしてる。僕が帰って日本のことを伝えると、みんなびっくり、きっと、すごく喜ぶ。その顔を想像する。そうしたら、さびしくない。もっと頑張ろうと思う。」

「家族や友達……」

#### 《19 城山の天守台に満月と月影》

「ほら、月影だ。都会ではよく見えないけれど、ここではくっきりと自分の影が見える。マイカントリーでは、自分を見守ってくれているお月様は、すごく大切。遠くにいる家族みたいだ。なんだか元気がでてきた。みんなのためにもっと頑張ろうと思うし、楽しいよ。ああ、とてもリラックスするな～。よ～し、決めた！」

「ダンディン、なにを決めたの？」

「僕が結婚して、奥さんや子供ができれば、日本に旅行させたい。まっさきにサンイン！その時はショウマも自分の奥さんと子供を紹介してくれ！」

「ええ～??? 気が早いなあ、ダンディン。でも、嬉しいよ。だんだん、ダンディン」

「だんだん？」「サンインの方言でありがとうのことさ」